

岩手県東日本大震災津波復興委員会 女性参画推進専門委員会による現地調査の概要について

【要旨】

9月9日(金)に、女性参画推進専門委員会による現地調査を実施しましたので、ご報告いたします。

1 実施日／訪問先

平成28年9月9日(金)／釜石市・大槌町

2 調査者(女性参画推進専門委員会委員8名)

菅原悦子 委員長 (岩手大学 副学長)
赤坂栄里子 委員 (岩手県歯科医師会 理事)
大沢伸子 委員 (岩手県商工会女性部連合会 副会長)
神谷未生 委員 (一般社団法人おらが大槌夢広場 事務局長)
手塚さや香 委員 (釜石リージョナルコーディネーター協議会)
平賀圭子 委員 (NPO法人参画プランニング・いわて 理事長)
山屋理恵 委員 (NPO法人インクルいわて 理事長)
両川いずみ 委員 (NPO法人いわて子育てネット 副理事長兼事務局長)

※復興局から高橋技監兼副局長、熊谷復興推進課総括課長等12名及び
沿岸広域振興局から1名、合計13名随行。

3 調査内容及び参集者等

(1) 復興支援コーディネート団体(釜援隊)の状況について(意見交換)

[場 所]釜石市情報交流センター

[参集者]釜石リージョナルコーディネーター協議会(釜援隊) 二宮隊長のほか、釜援隊女性隊員5名、(一社)RCF職員

(2) 防災教育による交流人口の増加について(視察・意見交換)

[場 所]大槌町内、(一社)おらが大槌夢広場事務所

[参集者]神谷事務局長(委員)、東梅氏(語り部)

4 意見交換

(1) 復興支援コーディネート団体(釜援隊)の状況について

[参集者からの主な発言]

- ・ 半官半民の“調整役”として復興まちづくりを進めており、2016年8月現在、16名の隊員が、官民のそれぞれの団体に配置され、その活動を支援している。
例えば、平田地区生活応援センターに配置された隊員は、県営平田災害公営住宅のコミュニティづくりの支援を行い、自治会主催の交流会や放課後子ども教室の実施の支援を行っている。また、@リアスNPOサポートセンターに配置された隊員は、情報発信事業「復興カメラ」や仮設住宅の見回り・見守りなどを行っている。
- ・ 活動を通して地域の女性から、震災前は地域のことにに関して意見を言うのは男性が中心であったが、外の人たちと接することにより、女性が自分たちも地域のことに関わって良いんだと自信を持てるようになったとの話も聞いている。

[委員からの主な発言]

- ・ 女性参画推進専門委員会は女性が切り口であるが、私たちが求めているのは、究極にはどのように多様な人たちが参画していくかということ。
その一番の切り口が、女性の参画である。今後、釜石市が多様性の中心となっていく素地を作っていくことを期待している。やる気があっても環境が整わないと、超えられないものがあるので、やる気や力を発揮できる場を整えていくことが課題。
- ・ 県外から来た釜援隊の人達が、それぞれの団体に個人として入るというやり方に驚きを覚えた。震災が一つのチャンスになっていると思う。異なる意見の人達をまとめていくリーダーをどのように育てていくかというのが今後の課題。

(2) 防災教育による交流人口の増加について

[参集者からの主な発言]

- ・ 昨年7,000人の企業研修を受け入れた。例えば幹部候補生向けのワークショップとして、旧大槌町役場を震災遺構として残すか否かといった正解の無い課題を、5~6人で1グループとし、1人が町長役、残りが副町長として話し合う内容とした。
被災時や復興期に大槌町民が抱えてきた課題について話し合うことで、逃げ道を作る「判断」ではなく、未知数な将来を含めて覚悟を決める「決断」や、対立した意見の中から共通点を探して前に進むこと、相手の話をきちんと聞くことを学ぶ。修学旅行生の場合には、意見が違う相手を嫌う必要はないことを学ぶ。
- ・ 研修には大槌町民に立ち会ってもらっている。上場企業の職員でも冷静な話し合いをすることは難しい状況を見て、町民の話し合いにおける自分の姿を客観視することができ、町民自らの成長につながる。

[委員からの主な発言]

- ・ このような人を育てる団体が沢山あるといい。未曾有の大震災からの復興の中、大変な状況の人達をまとめられる人材が増えることは力になる。沿岸のみならず内陸部でもこのような動きが広がることで岩手県が復興したことになる。
- ・ 白か黒かで物事を決める傾向がある中、多様性に応えるためには色々な答えがあることを認める必要がある。外から来た人が化学変化を起こしている。「おらが大槌夢広場」のワークショップで取り上げられる課題は震災時特有のものではなく、日常生活での課題でもある。
- ・ 大槌町は復興が遅れていると聞いていたが、神谷さんのような方が尽力することで復興は加速していく。また、震災時高校生だった語り部の東梅さんの話を聞き、多感な時期に震災を経験した心の痛みが伝わってきた。大槌町の若者の力を感じた。

(3) 現地調査全体を通して

[委員からの主な発言]

- ・ 発想が自由であるということやしなやかさといった女性の特性を生かした女性リーダーの役割はあるのではないかと考えている。本日の視察は希望を感じるものだった。
- ・ 沿岸部で起きていることは、この国で起きていることの先進的な取組のモデルになる。今のうちにやっておくべきことは選択肢を増やすことである。女性や外から来た人達が入口を広げてくれる。新しい物は、若者や女性、外から来た人が創っていく。
- ・ 今回の現地視察で被災地に新しい風が吹いており、その風を吹かせているのが若者や女性であることを感じた。被災地は課題先進地であるといわれているが、結果を導くためのプロセスを学ぶことが色々な課題解決につながるということを再確認した。解決の過程や方法を学ぶことがリーダーの養成につながり、住民の意識改革につながることを確認できた。このような取組を広げていければと思う。女性ならではの共感する力や色々な人を巻き込む力を活かし、女性も地域のリーダーになる素質があることが確認できた現地視察だった。